「生きる力」を育む長期集団宿泊体験活動
―その効果と課題―

藤村　法子　（京都教育大学大学院連合教職実践研究科）
水野　雄希　（京都教育大学大学院連合教職実践研究科院生）

A research study on 5-day group lodging activities that develop the “Zest for living”
－Effets and problems－

Noriko　FUJIMURA　Yuki　MIZUNO

2011 年 11 月 30 日受理

抄録：「小学校での１週間程度の集団宿泊体験活動」が改訂学習指導要領に位置付き、まさにその取組が展開されようとしている。この取組が今期学習指導要領の基本理念である「生きる力の育成」にどのように資するのか、京都市の学校 21 校（11 事例）からの聞き取り及び２校の長期集団宿泊体験活動の参加観察法よりその有り様を探ると同時に、参加児童へのアンケート調査を IKR 評定用紙[注1]によって検証し、成果と課題を明らかにすることを試みた。結果「生きる力」の指標となる「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」共に効果的な変容が見られた。「長期集団宿泊的行事」を学校現場にしっかり根付かせる為の課題も明らかになってきた。またこの IKR 評定用紙による評価を「子どもに育みたい力」のポートフォリオ評価として活用する可能性も見えてきた。

キーワード：生きる力　長期集団宿泊体験活動　規律ある共同生活　自然・人とのふれあい　学校の願い

Ⅰ．はじめに

平成 20 年 3 月に告示された「学習指導要領」では、平成 20 年 1 月中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申を受け「生きる力」の育成という理念が継承された。このことについて、小学校学習指導要領解説総則編の改訂基本方針の中で「平成８年７月の中央教育審議会答申（『２１世紀を展望した我が国の教育の在り方について』）は、変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの『生きる力』であると提言した。」[1)]と「生きる力」の理念を述べ、これを支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の育成を重要視した。また同答申で「心の育成」について「自分に自信がもてず、将来や人間関係に不安を感じているといった子どもたちの現状を踏まえると、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信を持たせる必要がある。・・中略・・親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流、自然の中での集団宿泊活動や職場体験活動、奉仕体験活動は他者、社会、自然・環境との直接的なかかわりという点で極めて重要である。」[2)]と提言し、「生きる力」の育成に関わって、「自然の中での集団宿泊活動」の重要性を示している。同指導要領解説「特別活動編」においても学校行事の内容について「自然の中での集団宿泊体験や異年齢の交流などを含む多様な人々との交流体験、文化的な体験などを重視する観点から、遠足・集団宿泊的行事の内容に『自然の中での集団宿泊活動など』と『人間関係など』を加え・・」[3)]その改善を図っている。同じく解説編の「遠足・集団宿泊的行事」実施上の留意点（カ）で「・・・集団宿泊活動については、望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達の段階を考慮しつつ、一定期間（例えば１週間（5 日間）程度）にわ

たって行うことが望まれる。」[4]と 1 週間（4 泊 5 日）程度の長期宿泊活動を明示している。上述にあるような子どもたちの現状、また学習指導要領、答申などによる環境整備のもと、長期宿泊体験活動の全国の小学校での展開が始まった。その効果についても、国立青少年教育振興機構はじめ多くの報告がなされ、全国的な規模での検証が進んでいる。しかし一地域に特定した事例検証はあまり報告されていない。論者は、地域・学校実態に即した「長期集団宿泊活動」であることこそが、その効果を大なるものにすると考えている。幸い、京都市においては本年度より全小学校（173 校）で「長期宿泊体験活動」が展開されている。これらの取組が「生きる力」の育成にどのような効果を及ぼすか、また更に有効にするためにどのような課題が存するのか、具体的に検証を進める中で、地域特性や学校の実態に合った「長期集団宿泊体験活動」の有り様を明らかにしていきたいと考える。

Ⅱ．長期集団宿泊体験活動の意義

実施上の環境整備が整い「長期集団宿泊体験活動」の取組みが今進み始め、また実際に京都市で本年度より全校展開が進められようとしているところから、本論文の課題設定をしたところであるが、今一度「長期集団宿泊体験活動」が出現してきた背景、現在の子どもたちの実態、「長期集団宿泊体験活動」に期待できることは何なのか等その意義を明らかにしていく。

1. 今、子どもを取り巻く現状

平成 22 年度の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」[注2)]によると暴力行為の発生件数は約５万９千件（前年度 約６万１千件）、またいじめの認知件数は約７万５千件（前年度 約７万３千件）不登校児童生徒数は約１１万５千人（前年度 約１２万２千人）と高い数値を示しており、教育関係者の努力にも関わらず、まさに子どもを取り巻く状況は深刻と言わざるを得ない。具体的な統計数字はでていないが、学級の秩序が機能しないいわゆる「学級崩壊」の事例も筆者の周りでも多く耳にする。もちろん大多数の子どもたちは、日々豊かな学校生活を送っていることは言うまでもない。しかし、個別への話は聞けるが、全体の中では話が聞けない、授業中にもかかわらず立ち歩く、子ども同士よりも大人に関わりたがる、自分の思いは主張するが、相手の気持ちを理解しようとしない、等など教室で見える子どもの気になる言動は後を絶たない。他者へだけでなく自分自身の存在についても大切にしない、自信が無いなどの子どもの様相も気になる。「平成 21 年度全国学力・学習状況調査」において「自分には良いところがあると思う」という質問に、小学６年では 25%強、中学３年では 38%の子どもが否定的な回答をしている。「どうせ私にはできないし・・・」「それができてどうなるの？」「私の言うことなんか聞いてくれないでしょう。」などなど子どもの声が聞こえてくる。また、基本的生活習慣の確立についても課題がある。一例をあげると、子どもの就寝時間調査[注3)]では３歳児の４割が午後 10 時以降に就寝している、また就寝時間が遅いほど朝食をとらない子どもが増えているなど、子どもの生活の夜型化の報告がある。朝から教室で欠伸をする子ども、朝の排泄が規則化されておらず腹痛を訴える子ども、朝食を食べてこない子ども、挨拶ができない子どもと、教室での子どもの気になる姿をあげればきりがない。なぜ、このような報告が数多く出てくるのか、その要因を特定し一概に言いきることが難しいのは当然であるが、多くの研究者が子どもの体験不足を指摘している。平成 22 年度の国立青少年教育振興機構の「『青少年の体験活動と自立に関する実態調査』の報告」によると、青少年の自然体験活動の実施率はここ 5 年間で減少傾向にある。特に「山登りやハイキング、オリエンテーリングやウオークラリー」、「昆虫や水辺の生物をつかめること」等は 10 ポイント以上低くなっている。また、「いらいらしたりむしゃくしゃしたりする」「悩んだり落ち込んだりする」は高い数値を示している。このような状況の中で 21 世紀を担っていく子どもたちの「生きる力」を育んでいくには「望ましい体験」の復活が急務であると考えるのである。

2.「長期集団宿泊体験活動」の意義

前述の「青少年の体験活動と自立に関する実態調査」で、「体験活動とそれを通して得られる資質・能力やその子どもの体験活動との関係」[5]で興味深い報告がなされている。結果を①～⑥にまとめているが、その中の 2 項目について紹介する。

○体験を多く行っている青少年ほど、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身についており自己肯定感も高い傾向にある。
○地域活動やボランティア活動などの子どもの頃の体験が多いほど、人間関係能力、文化的作法・教養等の資質・能力が高い。

体験活動と「生きる力」の育成に関して大きな関わりがあることが示唆されている。　次に「長期集団宿泊体験活動」に期待されていることに論を進めていきたい。長期集団宿泊活動調査研究会議[注 4]座長大島は、その意義について「第一に、親元を離れた長期の集団宿泊であること」「第二に自然環境を含めて教育資源が豊かにあること」の２点を挙げている。「長期集団宿泊活動のプログラム事例とその効果」の中で、体験活動が人間関係能力、やる気（意欲・関心）、規範意識、自尊感情、共生感等に大きく関わっていることを詳しく報告している。これより先、学校現場では、その重要性に鑑み、集団宿泊活動を実施してきている。京都市では、従来４年生で１泊２日、５年生で２泊３日の自然宿泊体験活動、そして６年生で１泊２日の修学旅行という集団宿泊活動を系統的に実施してきた。今回の取組では、「長期」と強調されることに一つの意味があると考える。平成 19 年教育再生会議第二次報告で、「小学校で、１週間の集団宿泊体験や自然体験・農林漁業体験活動を実施する。」と提言した。時期を同じくして、文部科学省でも「長期自然宿泊体験活動」のリサーチが本格的に始まったと考えられる。この長期、１週間というのは、子どもにとってどんな意味があるのだろう。１週間、家族から離れて生活することは、否が応でも自分のことをきちんとし続けなければならない状況に追い込まれるのである。単に楽しい楽しいでは終わらないはずである。友達関係においても、表面的に仲良くする関係から、１週間寝食を共にする中で課題（困難さも含めて）を、共有し、共に乗り越えていかねばならない本当の意味での仲間に変化していくと考えられる。１週間という長い共同生活の中で、子どもたちは自分の本当の姿を表出する、せざるを得ない状況に置かれる。その上で、結ばれる人間関係は強いものとなってくると考えられる。どこまで自分の思いを出すことが許されるか、子どもたちは、真の関わりの中で学んでいくのである。「長期」というところがまさにポイントである。またこれらの活動が自然の中で繰り広げられることも、子どもたちにとって本当に重要なのである。子どもたちの自然体験が減少してきていることは前述したところである。自然には大きな力がある。その恵みも、時には人間にとって厳しい状況、不便さをも容赦なく示してくる。自然の中で暮らすことにより子どもたちは五感を通して自然そのものを感じ取るのである。自然の懐に抱かれる時、小さな命の輝きに、町では滅多と目にすることができなくなった水のせせらぎに、リンとするほどの朝の空気のすがすがしさに、目を疑いたくなるほどの満天の星に、紅葉の美しさに、朝もやに、自然の優しさを感じるはずである。その優しさの中だからこそ、殆どの子どもが今まで経験したことない困難を（今まで家族に手伝ってもらっていた自分の生活を自分でこなしていかねばならない辛さや、１週間ずっと一緒に生活する友達との間に必ず起こってくるだろうトラブル等など）乗り越えることができるのではないかと考える。人間にとっての自然の素晴らしさを観念としてではなく、体感を通して認識していくこと、そのことも相まって、「長期集団宿泊体験活動」の意義があると考える。

では、実際にどの様な取組が展開されているのか論を進めていく。

Ⅲ．長期集団宿泊体験活動の実際

ここでは、京都市で取り組まれている「長期集団宿泊体験活動」の様子を、21 校（各行政区から抽出した 12 事例）への聞き取り及び論者水野の参加観察より、「行き先」「ねらい」「具体的活動」に焦点を当てて学校間の取組の共通点及びその違いを明らかにしていく。

1．全市の取組校から

学校からの聞き取りや学校で作成している「しおり」から、各校で実施されている「長期集団宿泊活動」の概要をまとめてみる。

	行き先	ねらい	主　な　活　動
1	国立若狭湾青少年自然の家 ４泊５日　40 名	○感動する心、生命を尊重、環境保全の態度 ○仲間意識、責任感、思いやりの心	①カッター入所　②スノーケリング　若狭塗箸作り　③養殖魚餌やり体験　干物作り　ビーチクラフト　漁師との語らい　④大敷網漁見学　シーカヤック　砂浜造形　キャンプファイヤー　⑤カッター退所
2	花脊山の家 ４泊５日　68 名	○自然を愛する心情 ○責任感　協力する態度　思いやる心	①オリエンテーリング　お話会　②登山　ナイトウォーク③フライングディスクゴルフ　アスレチック　野外炊事　天体観測　④自然観察　野外炊事　キノコ観察　キャンプファイヤー　⑤野外炊事　新聞作り
3	みさきの家 ４泊５日 ４校　15 名	○自然を愛し、自然を保護する態度　○助け合い、協力、責任の大切さの理解	①野外炊事　星の観察　②シーカヤック　公園散策　きもだめし③魚釣り　絵手紙　キャンプファイヤー　④所内探検、磯浜観察　⑤鳥羽水族館　　＊隔年実施
4	花脊山の家 ４泊５日 57 人	○自然を理解し愛する心 ○自分の役割を果たすことの大切さ　○協力をして最後までやり遂げる	①北山杉研磨体験　白杉母木見学　ナイトハイク　②自然観察、野外炊事　クラフト　手紙　③アスレチック　野外炊事　五感じゃんけんゲーム　天体観測　④登山　キャンプファイヤー　⑤環境調べ
5	花脊山の家 ４泊５日 ３小　86 名	○自然を満喫　○生きる力を身につける ○学校間交流を深める	①クラフト　キャンドルファイヤー　②魚つかみ　アスレチック　野外炊事　天体観測　③交流の森ハイク　④自然観察　フライティングゴルフ　⑤野外炊事　キャンプファイヤー　⑥交流タイム
6	花脊山の家 ４泊５日 71 名	○規律ある共同生活 ○自然に親しむ ○友達と協力する	①アスレチック　天体観測　②魚つかみ　フライングディスク　野外炊事　③アスレチック　おやつ作り　葉書　ナイトハイク　④登山　キャンプファイヤー　⑤壁新聞作り
7	花脊山の家 4 泊 5 日 50 名	○自然を大切にする心 ○仲間意識 ○協力　責任	①アスレチック　野外炊事　手紙　②クラフト　運動会　ナイトハイク　星観察　③登山　キャンプファイヤー　④野外炊事工作　スタンツ大会　⑤壁新聞作り
8	花脊山の家 4 泊 5 日 3 小　81 名	○自然を大切にする心 ○協力　進んで行動 ○ルール、マナーを守る ○思い出作り	①野外炊事　ナイトハイク　②登山　手紙　天体観測　③野外炊事　オリエンテーリング　④魚つかみ･塩焼き　アスレチック　キャンプファイヤー　⑤ふりかえり
9	ゼミナールハウス 4 泊 5 日 3 小　40 名	○集団生活　自然体験 ○感動する心　環境保全　生命の大切さ ○仲間意識　責任感　規範意識　○郷土愛	①オリエンテーリング　焼き物体験　②伝統食・山菜料理作り　クラフト　星の観察　③京北トレイルコースハイキング　片波川源流伏条台杉探検　④京北の民話　「川」学習　乗馬体験　キャンプファイヤー ⑤体験発表
10	花脊山の家 4 泊 5 日 143 名	○自ら進んで行動 ○生命を尊び、自然を愛する心 ○助け合い　協力	①ネイチャービンゴ　②野外炊事　アスレチック　③交流の森ハイキング　天体観測　④野外炊事　クラフト オリエンテーリング　キャンプファイヤ　⑤焼板仕上げ
11	花脊山の家 4 泊 5 日 78 名	○自然を愛し、保護する ○グループ活動 ○計画性	①オリエンテーリング　クラフト　ボンファイヤー　②野外炊飯　自然観察　火おこし　天体観測　③フライングディスクゴルフ　魚つかみ　魚の炭火焼き　④登山　キャンプファイヤー　⑤焼き物体験

12	花脊山の家 5 泊 6 日 47 名	○生活習慣の確立 協力　試練　工夫 挑戦　笑顔　感謝	①クラフト　野外炊事（以下毎日野外炊事を実施）　ボンファイヤー　②木葉書　グループファイヤー　③川遊び　サバイバルゲーム　火おこし　キャンドルファイヤー　④魚つかみ　竹飯　ナイトハイク　⑤　野外パーティ　キャンプファイヤー　⑥クラフト　野外炊事

（表１）

(1) ねらい

表１のねらいを分類すると以下に示す表２のようになる。学校がこの長期集団宿泊活動で期待していることが明らかになってくる。自然に囲まれる中で、自然への感性を育むと同時に、規律ある集団生活を通して、困難に立ち向かう強さ、友達に温かい思いをもち協力する態度の育成を期待している。また統合前の学校、少人数の学校、学校の特色ある活動等から独自のねらいを設定している学校があることがわかる。

・自然体験（親しむ、保護、生命尊重等）12 校	・規律ある集団生活（生活習慣の確立　規範意識等）12 校
・仲間意識（協力、思いやり）12 校	・困難に挑戦、最後までやり遂げる　7 校
・自ら進んで、工夫、計画性　4 校	・学校独自のねらい（地域、環境、学校間交流）　6 校

（表２）

(2) 活動

活動についても、ねらいに即して各学校で様々に工夫がなされている。共通して取り組まれている活動は、野外の自然観察（天体観察、磯観察含）、野外炊事、キャンプファイヤー等である。行程の後半に登山などの厳しい活動、その後にキャンプファイヤーを置いている学校が多いのも意味あるところと考える。学校の特色ある活動として、活動地の地域の方（地元住民）、学校を支えてくださっている地域の方（学校運営協議会）との交流の場（お話を聞くなど）、またその地でなければできない活動（北山杉体験、民話、郷土料理経験、等）など工夫がなされている。また京都市の調査[注 5)]では、海の体験活動を中心にしている学校が１７校、山の体験活動を中心にしている学校が１４９校となっている。安全確保の体制、施設数、生涯に渡って楽しめる自然体験等の観点から「山の自然体験活動」が中心となってきているのではないかと考えられる。

2. 参加観察から

論者水野は、今回４校２取組に学生ボランティアとして「花脊山の家」における「長期集団宿泊体験活動」に参加する機会を得られた。実際の活動から子どもたちがどのように自然、友人と関わっていくのか、また生活規律をどのように身につけていくのかその記録から追ってみる。

(1) T 校の場合

1日目	入所式は野外で行われ、当日は相当寒い日であったのにもかかわらず開会 30 分も前から並んで待っている。期待感の表れかと思いきや、「皆並んでいるし・・」「誰かが 30 分早くなったと言ってたから」と自分の判断ではなかった。入浴時はお風呂の入り方から指導しなければならないのに少し驚く。就寝準備も遊ぶ方が中心でなかなか進まない。
2日目	ディスクゴルフは子どもたちにとって楽しいスポーツであった。熱中してくると「早く投げろ」と声を荒げたり、他のグループの妨害となるような行動が出てくる。野外炊飯では、調理・食べるまでは良く協力していたが、後始末になると遊ぶ子どもが出だした。担任教諭から適切タイムリーな指導がなされた。
3日目	長くて高い吊り橋や急勾配の丸太登り等、こどもにとっては冒険心がそそられるものの、体力・調整力等個人の能力差によって難所を克服する意欲、時間も違い、グループ活動は難しいと思っていたが、できない子のペースに合わせたり手を引いてあげたり、子ども同士の関わりが見えた。魚の塩焼きは、生きた魚を自分の手でつかみ、さばいて焼いて食べると、インパクトがあった。まさに子どもたちにとって命を頂く経験だった。野外炊事の片づけも遊ぶ子どもはいなくなった。就寝準備でシーツ交換を論者が手伝おうとすると「自分でできる」と一人で頑張った。
4日目	今日は登山、歩く途中山のマナーを話すも素直に聞き入れてくれた。山登りが苦手な子どもに気配りする姿が見られた。声を掛け合って登りきった。夜のキャンプファイヤーも圧巻であった。出し物も学級のカラーが出ていて楽しかった。皆で盛り上げようとする雰囲気があった。「５日間寝食、苦楽を共にしてきた仲間だよ」という言葉では表現しにくい連帯感を感じた。その後の入浴も、マナーについての指導は殆どその必要がなかった。

5日目	活動最終は「花脊焼き」だった。一番の思い出を心を込めて形造っていた。退出準備も、自分の荷物を手際よくまとめ、その後、シーツ布団など互いに助け合って後始末をしていた。「来た時よりも美しく」と施設内の清掃も皆で頑張っていた。帰路のバスでは、やはり疲れからか眠る子どもが多かった。論者も５日間の子どもの変容と車窓から見る紅葉の美しさに満足しながら、しばらくまどろんだ。

４日目の取組（登山・キャンプファイヤー）で、子どもたちの結束力は高まったようである。また入浴、就寝準備など、毎日規則正しく繰り返す中で、望ましい習慣が身についていった。

(2) ３校合同実施の場合

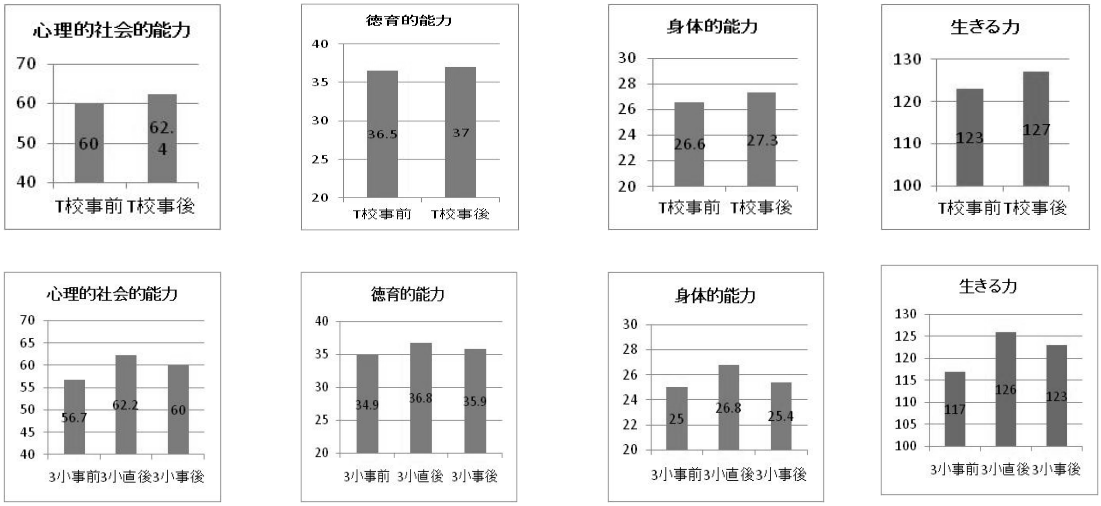
もう一つの事例は３校が合同で実施したものである。子どもたちの活動の中心となるグループは、３校混合で編成されていたが、この長期集団宿泊活動に向けての事前の取組、またそれまでのいろいろな学校行事も合同でする機会が多く設けてあり、初日より子どもたちは打ち解けた様子を呈していた。一部、仲の良い子ども同士が固まる傾向も見られたが、日を追うごとにその連帯意識は強固になっていった。論者藤村が「山の家」に参観に行った時は、丁度自分たちで採ってきたやまめを料理し焼いて食するところであったが、各グループ３校の子どもが混成されているとはわからないほど協力し合っていた。近々統合する予定の学校であり、この長期集団宿泊活動の目的の一つに、新しい学校の核として、下級生をリードする役割を子どもたちに自覚させる場として考えられていたのではないかと推察する。（紙面の関係で詳しい状況説明は省略）

Ⅳ．長期集団宿泊体験活動の成果と課題

学校の実態、ニーズに合わせて様々な取組が展開されていることや、どの学校でも取り入れている共通プログラムや、行程を策定するに留意すること（行程のどのあたりに、どんな活動を取り入れれば、子どもたちの人間関係がより豊かに固い結びつきになるか）また、毎日決まった活動を規則正しく配置する意味等が明らかになってきた。さらに「生きる力」に関わってもう少し分析的に、また、子ども一人ひとりの変容、更には、学級・学年の変容等、学校長の聞き取りから定性的にその成果を探っていく。

1.「IKR 評定用紙」による「生きる力」の変容測定

「IKR 評定用紙」を活用し、「生きる力」に関わってのアンケート調査[注6)]を実施した。T 校では宿泊活動の前後各１回学校で実施し、3 小学校では活動前に学校で、活動後については「山の家」退所式直後と帰校１ヶ月後、学校でと計３回実施した。その結果は以下の通りである。



グラフで示されるように「長期集団宿泊活動」実施後「生きる力」の３能力とも有意差ではないが、好ましい変容を見せている。また、3 小学校合同で実施した事例では、体験直後の変容が最も大きく、体験１ケ月には少し下がっている。前述表１の U 校(No.12)でも毎年効果測定として自校調査をし、入念な分析がなされている。この調査結果も１ケ月後にその効果が減少するという傾向が出ている。しかし、活動後の結果は、いずれの学校

も宿泊活動前の数値よりは高く、「長期集団宿泊体験活動」が子どもを変容させるということが明らかになったと言えよう。さらに具体的な変容の姿を見てみる。

2. 学校聞き取り調査より

前述の表１の実施校の校長及び教頭へのインタビュー結果から、「長期集団宿泊体験活動中の子どもの変容」「学校生活や家庭生活で見られる変容」「学校運営に関わっての効果」の一端が伺えた。また今後の「長期集団宿泊体験活動」への「課題」についても明らかになってきた。

(1)「長期集団宿泊体験活動」の中で見られた子どもの変容

①集団規律の確立

「5 分前集合」「グループ活動時は、きちんと全員一緒に活動する」「食事のルール」「寝具の準備」「起床」「時間を守る」等、行程前半は指導者が注意することもあったが、後半からは、声かけをしなくても、子どもたちでお互いに意識し合い約束事がきちんと守られるようになった。

②人間関係の深まりと広がり

5 日間寝食を共にする中で、友達の個性をより理解することができたようである。また、活動中困った時、手伝ってもらったり、励ましてもらったりする中で、より密度の濃い友人関係が構築された。集団活動そのものがしにくい小規模の学校の場合、合同で実施することにより、集団で活動する楽しさを経験することができた。指導者が当初もっていた不安は一掃され、子どもたちは臆することなく自分を発揮することができていた。合同実施した事例が今回４事例あったが、いずれもこの活動を通して、本物の学校間交流ができたとの感想をもたれていた。登山活動で全員登りきったことに、指導者が「みんなが登りきれてよかったね」と子どもたちに声をかけた折、返ってきた子どもたちの反応は「みんなで登れてよかった」だった。声をかけあったり、手をひきあげてもらったり、まさにみんなで登りきったと感じていたようである。強い連帯感が生まれた瞬間ではなかっただろうか。地元のゲストティチャー、ボランティア、施設内で出会う他の学校子ども、施設の方等に、挨拶を進んでするようになった。

③基本的な生活習慣の確立

早寝・早起きがしっかりできるようになった。入浴マナー、使ったものは片づける、食事の後始末、自分の衣服管理など毎日の生活を自分の力できちんとできるようになった。

④個の変容

リーダーを務めていた児童の伸びが極めて大きく感じた。「皆の為に自分はやりきれたのか」「自分は無力だった」と泣き出す子どももおり、リーダーとしての自覚がここまで育ったのかと指導者を驚かせた。指示を待つだけでなく、自分で考えて行動する力がついてきた。(自主性) 学校では集団行動がとりにくかった子どもが、宿泊活動では、皆の中で集団の一員としての行動がとれるようになった。固定されていた人間関係の中で、自分が発揮しにくかった子どもが新しい仲間の中で、他の子どもをリードするなど活躍し新しい一面を発揮することができた。

(2) 学校・家庭へ帰ってからの変容

5 日間の活動を通して変容した姿は、維持されている部分と続かない部分とがある。学級、学年としての連帯感は、その後の学校行事 (学芸会等) で発揮されている。学級の中での自分の仕事に対する責任感が感じられる。高学年としての自覚のある行動がとれるようになってきた。「5 分前行動」は今も意識されている。また保護者から「家庭内でも自分のことは自分でするようになってきた」との声が寄せられるなど自立してきた子どものようすが伺える。一方、「早寝早起き」など生活習慣面については、その維持は難しいと感じる部分もある。

(3) 学校運営からみた変容

教師が普段学校では見ることのできなかった子どもの新しい一面を発見するなど、子ども一人一人の理解が深まった。苦しい経験を共に行動したり、子どもを励まし、時には手を貸したりする活動が子どもの心に届いたのか、「先生ぼくな・・」と自分のことを語り出すなど、子どもと担任以外の教職員との信頼関係が深まった。またボランティアとして参加して下さった学校地域の方々と学校教職員との相互理解も深まった。地域の方は学校の教職員の子どもの指導の様子をつぶさに感じることを通してその大変さ、その意識の高さに、教職員は自分より高齢な地域の方がここまで溌剌と活動される姿に、お互いの子どもへの思いに気づき、「子どもの為に頑張ろ

う」という共通の思いが一段と高まったようである。担任団はこの行事を成功させようと、主任を中心に学年が本当に一つにまとまり行動した。その重要性を身をもって経験したと言えよう。また活動に際して、いろいろな方（宿泊施設の方、ボランティアの学生・学校運営協議会など学校地域の方、地元のゲストティーチャーを務めてくださる方）との折衝、また 5 日間で予期せぬことの出現に対応するなど、そのマネジメントの能力を更に高めたと感じる。不登校傾向にある子どもが、この 5 日間の活動には全て参加するなど、子どもの理解に立った今後の新たな対応を考える手がかりが掴めたように思う。

（4）課題

ボランティア人材の確保が課題である。学生や、学校の応援隊である学校運営協議会のメンバー等で支えられているが、人的支援体制の確立が課題と現場は感じている。教職員の勤務体制も校長の悩むところである。担任としては子どもがいる間は全行程参加したい思いが強い。しかし、現在教職員は途中で交代するなどの措置を講じている。管理職としては、その疲労度を考える時、その思いだけに応えるわけにはいかない。また改訂学習指導要領の改訂後の授業時数の確保も課題となってくる。自校の課題意識に合ったプログラム開発も求められるところである。

3. 結果考察

「長期集団宿泊体験活動」について様々な角度から検証してきたが、子ども及び子どもを取り巻く集団に、また学校運営面にも多くの好ましい変容が見られ、「生きる力」の育成に大きくその効果が認められた。これらの変容をもたらせたのは何なのか再度考えまとめてみる。

（1）宿泊日数（4 泊 5 日の意味）

平成 21 年文部科学省「農山漁村での宿泊体験活動の教育効果」[注7)]について、取組効果を宿泊日数別（2 泊 3 日、3 泊 4 日、4 泊 5 日以上）に調査しその結果を示している。いずれの項目も 2 泊 3 日と 3 泊 4 日では効果に大きな差がでている。3 泊 4 日の方が好結果を示し、4 泊 5 日以上になるとその効果が更に高くなっている。宿泊数が増えるということは、単に体験活動の種類や活動時間がふえるというだけではない。24 時間ずっと生活を一緒にする日数が長くなるというところに意味があると考える。子どもたちが、表面的に自分を規制できる時間にも限りがある。3 日目ぐらい（従来 2 泊 3 日）までは何とかわがままも出さず、頑張ろうと思うが、だんだん自分の思いが抑えられずに友達と衝突する。自分の割り当てられた仕事を果たすことも面倒になってくる子どもも出てくる。実際上述の事例校でも 3 日目の夜辺りからトラブルが出てきている。今、分裂すると残りの日程自分達は生活ができなくなる、そこでどうすればこの局面を乗り切れるか子どもたちは考える。グループで考え話し合わなければならなくなるのである。他のメンバーの思いをじっくり聞くことで自分も同じ気持ちだと分かり合えてくる。教師がそばで温かく見守る中で、子どもたちはお互いをわかろう、わかってもらおうという努力をする。多くのグループは分裂よりも結束を選ぶ。いったん分かり合えると、手を貸してくれることが、注意してくれることが、よけいなお節介でなく優しい思いやりに変わるのである。3 日目、4 日目に達成感のある大きな活動（登山、キャンプファイヤー等）を取り入れることが、子どもたちの結束力をより強めることも 12 事例が語るところである。長期集団宿泊体験活動の効果を大にするポイントがここにあることも判明した。一方、地味ながら子どもが本当に身につけなければならない基本的な生活習慣が、毎日の規則正しい生活の繰り返し中で確立されていくのである、しかもそれは集団で繰り返す日々であるから、友達の気持ちと行動を、自分のそれと葛藤させながら受け入れていくことを余儀なくされ、自己を確立しながら望ましい集団行動ができるようになってくるのである。コミュニケーション力を最大に発揮しグループを円滑に進めようとする時、子どもは大きく成長する。人間関係形成能力が培われるのである。話し合う時間がゆっくり保障されているほどここでの学びは大きくなると考えられる。そのための 4 泊 5 日なのである。

（2）自然の中での活動

子どもたちは、学校や家庭・地域と様々なところで活動する。いずれの体験も子どもたちの成長にかかすことのできないものであることは言うまでもない。しかしこの宿泊体験活動が自然の中で実施されることにまた意味があると考えられる。広瀬[6)]は、「自然の中で活動する魅力」を「不便を楽しむ」としている。「野外は不便であり、汚れ、危険ですらある。ところが不便だからこそロープ 1 本、小枝ひとつの有り合わせで工夫が生まれる。不便が面白くなってくる」困難にぶつかった時友達と一緒に工夫することで、工夫を分かち合うことで楽しみは

倍加する。困難も不自由な状況も自然の中だからこそ享受できるのかもわからない。不便な見返りに自然は多くの恵みを用意してくれている。3 日目のトラブルも、疲れきって発する荒げた声も、満天の星空にきっと昇華されることと確信する。自然の恵みを享受した子どもは優しくなれる、自然にはそんな力があると確信している。

4. 課題解決に向けて

「長期集団宿泊体験活動」を実施運営するに当たっての課題と、効果をあげるための課題、両面からその解決方法を考えていく。

(1) 効果の持続

IKR 調査の効果測定調査では、活動終了直後の効果測定が最も高い値を示している 1 ヶ月後の測定は下がるものの活動前より高いことは前述の通りである。このことに関して広瀬はさらに「その『効果』は長続きはしない。それは子どもの心への効果がなかったということではない。短い日常体験はすぐに薄れていくということだ。あまりに過大に期待してもいけない。」と述べている。しかし子どもの教育に直接携わる者としては、折角の芽生えを何とかしたいと思うのは当然である。学校で継続して生活リズムを崩さないことと家庭への協力を強く求めていくことが必要である。「非日常の喜ばしい体験」を日常の経験に置き換えていくことが求められるのである。その折、行動の変容を子ども自身に気づかせることが自信に繋がり、継続させることへの意欲に繋がる。崩れそうになる時、ほめること、この経験を思い出させることから自己の確立に迫れないだろうかと考える。

(2) 人材確保

この活動には多くの人材が必要であるということは言うまでもない。人材確保は学校それぞれの努力に関わっていることが大きいことは否めない。学校がそれまで築いてきた人の繋がりで賄われているのが現状とも言える。もちろん行政も自然活動の指導者育成に力をいれているが、現状に間に合っていないのも事実である。近隣の学校で合同実施も一つの解決策だと考える。もちろん学校規模にもよるが、この研究で取り上げた 12 事例の内 4 例が合同実施であった。近々統合を控えているとか、学校規模の課題からの合同実施であったかと思われるが、一般化につないでいくことは可能であると考える。中学校区内の小学校での合同取組は人材確保のメリットだけではなく、小中連携に繋がる小々連携ともなり得る。

(3) プログラム開発

5 日間どのような活動に取り組ませるか悩むところである。京都市教育委員会では「花脊山の家」が数多くのプログラムを開発している。このように公的機関が用意しているプログラムを活用することも一方法である。その折に、自校の課題に合わせた内容を意識することが重要である。調査校の或る校長先生は、基本的生活習慣の確立と仲間作りを目標に「長期集団宿泊体験活動」の基本方針を「本当に苦しい状況に子どもを追い込む」とされ、食事の大部分を野外炊事とされた。子どもたちの最大の関心事（子どもだけではなく、人間にとっての最大の関心事は或る意味「食」から始まると言えよう）の食を充実するためには、野外炊事で友達と協力するしかないわけである。必要から生まれた協力関係が、真の協力関係に変わっていくことを確信されていた。また郷土への関心を郷土愛にまで高めようと、学校が存する地域の自然財産に目を向けられ、そこでの自然体験活動、地元の方とのふれ合い、郷土料理体験などを中心にプログラムを考えられた取組などがその例である。宮川は「自然の中での宿泊体験活動を意義あるものにするには、ねらいとする体験の価値の検討が必要である。」と「自校の改善すべき課題を明確」[7]にし、内容を考えていく必要性を述べている。また、プログラムを組む上で大切なことは、ゆとりである。子どもたちがじっくり考え、じっくり話合い、やってみて、また考え、話合う、この繰り返しの中で大切な仲間に気づき、まんざらでもない自分自身を発見していくのであると考える。子どもたちにしっかり話し合える時間の確保が重要である。また帰校してからしなければならないこと（exp「宿泊活動で学んだこと発表会」）の準備を現地で計画することで、帰校後その時間を他の学習へ割り当てることができたり、現地で図工や理科の学習を計画することで、宿泊活動の内容も充実すると同時に授業時数確保につながったりするのではないだろうか。5 日間のプログラムを考える時、どこに山場をもってくるか、その配列にも気を配らなくてはならない。ただ運営上の観点からだけではなく、子どもにこの（自校の）長期集団宿泊体験活動で一番育成したい力と態度がどのように育まれて行くのか十分考えた上でのプログラミングを考えていかねばならない。

(4) 学校運営に活かす

子どもだけではなく、この取組は教師集団をも成長させてくれる。特にこれから増えてくる若手教員がマネジ

メント能力を高めていく最大のチャンスである。ねらいを達成するためのプロセスをどのように作っていくか誰にどのような協力を依頼するか計画し、自らが折衝に当たるなど、まさにマネジメント力が求められる。反対に考えれば、この活動をとり仕切ることで組織運営の一端を経験することになる。若手教員の成長はこれからの学校運営の鍵となる。

また日々の教育活動の成果と課題の一部をこの「長期集団宿泊体験活動」で見ることができるのではないかと考える。そして学校の改善課題をこの中に見つけることができる。まさに学校評価の場として活用することも可能である。

Ⅴ．まとめにかえて

12 の事例を中心に「長期集団宿泊体験活動」の検証を進めてきた。学校の様々な実践から、「生きる力」に関わっての子どもの変容と過程が明らかになり、その効果が認められた。子どもはスパイラルに成長していく。この体験で身に付けたいろいろな力・態度の戻りはある。しかしこれらの体験が彼らを変容させたのは紛れもない事実である。この事実を更に丹念に読み解いた結果を今後に活かしていくことが重要である。いろいろな学びで得た知識や技能を、自己の課題解決に向けてフルに活用する中で体得したものは、子どもたちにとって「生きる力」そのものである。その獲得の中には自然との出会いそして多数の人々との出会いと新しい繋がりがある。ここに「長期集団宿泊体験活動」の魅力と意義があることを改めて確認することができた。地域の実態、学校の願いに即したオリジナルな「長期集団宿泊体験活動」は更にその魅力を増す。今回は 12 事例の研究であったが、そのサンプル数を増やし、学校の実態や願いにあわせた「長期集団宿泊体験活動」の有り様をさらに追及していきたい。この研究で活用した「IKR 評定用紙」は、子どもたちにとって育成すべき自分の指標となりうる。自己の「生きる力」の形成ポートフォリオとして今後も継続して活用していくことができるのではないかと考えている。また、この調査研究で見えてきた子どもたちの人間関係の形成プロセスをより明らかにしていくことができれば、学級づくり・学年づくりに活かしていけるのではないかとも考える。既に調査校のある校長はこの人間関係の形成プロセスを次年度の学校づくりに活用していこうと着々とそのもくろみを図っている。

注 1)橘直隆（筑波大学大学院）と平野吉直（信州大学）が開発した「生きる力」を測定するための 70 項目の調査項目を基に体験活動による教育効果を図る手法の一つとして、国立青少年教育振興機関が項目を絞り簡易「IKR 評定用紙」として開発したものである。

注 2)文部科学省　平成 22 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2008 より

注 3)厚生労働大臣官房統計情報部　「第 4~6 回 21 世紀出生児縦断調査」（2005~2007）日本子ども資料年鑑 2010 から

注 4）国立青少年教育振興機構に「長期自然体験活動モデルプログラム開発」に関して平成 21 年に設置された調査協力者会議

注 5)京都市教育委員会　野外活動施設「花脊山の家」平成 23 年度集団宿泊活動計画実施調査より

注 6)質問内容は「いやなことは嫌とはっきり言える」等の心理的社会的能力(14 項目)「自分勝手なわがままを言わない」等の徳育的項目(8 項目)「早寝早起きである」等の身体的項目(6 項目)からなる。

注 7)文部科学省平成 21 年度「農山漁村での長期宿泊体験による教育効果の評価結果について」より

引用文献・参考文献

1)文部科学省　「小学校学習指導要領解説総則編」2008

2)文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」中教審答申 2008

3),4) 文部科学省「小学校学習指導要領解説特別活動編」2008

5)国立青少年教育振興機構　「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」平成 22 年度調査報告書（概要）2011.11

6)広瀬敏道「自然の中で活動する魅力」『初等教育資料』No.858　2010.3

7)宮川八岐「長期宿泊活動の教育的意義と課題」『初等教育資料』No.858　2010.3

⑴杉田　洋「よりよい人間関係を築く」図書文化社　2011.8

⑵湯浅昭司「さぁ　長期宿泊体験活動はじめましょう！」『道徳と特別活動』Vol.126　2009.8

⑶今谷順重「体験活動の充実をどう進めるか」『ポイント解説　中教審「学習指導要領の改善」答申』教育開発研究所 2008